

坂戸市文化財ガイド

坂戸の歴史



埼玉県坂戸市教育委員会

※表紙写真

大家小学校遺跡（森戸）出土の

土器（縄文時代中期）

（市立歴史民俗資料館蔵）

あ　い　さ　つ

私達の住む坂戸市は、長い歴史と多くの文化財があります。ここ数年、市内の遺跡からの新発見が新聞紙上を賑わし、市民の方々の文化財に対する関心も日ましに高まっていると感じられます。また、歴史や文化財に関する簡略なガイドブックを求める声も大きくなってまいりました。そうした状況をふまえ、市の歩んできた歴史を簡単に紹介する手引書として本書を刊行いたしました。

本書がより多くの方々に御利用いただき、歴史や文化財への御理解を深めていただければ幸いです。終わりに、本書の編集にあたって文化財の調査・撮影・提供などに御協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月30日

坂戸市教育委員会教育長 木村 公一

発刊にあたって

平成3年は、本市においては市制15周年にあたり、周辺でも鶴ヶ島市・日高市が誕生するという節目の年となりました。こうした機会にふるさとを見つめ、親しみを深め、過去を学ぶことにより未来への指針とするための手引として、坂戸市文化財ガイドを刊行することとし、その1冊めとして本書を編集いたしました。既に市の歴史については『坂戸市史』全12冊が刊行されており、本書は文化財の紹介を兼ねた概略的なものとしました。そのため取り上げるべくして取り上げられなかった出来事や文化財も多く、もの足りなさを感じる点も多いかと存じますが、それらについては今後の普及活動の中で解決していくたいと存じます。なお、『坂戸市史』や既刊の報告書もぜひ御参照ください。また、市内にはまだまだ多くの文化財が眠っていると思われますので、それらについてお気付きの点がありましたら教育委員会まで御連絡いただければ幸いです。

1 坂戸のあけぼの

坂戸市域に人が住み始めるようになったのは、今から約1万年前と推定される。中小坂・多和目などから石器が発見されているが、遺跡の様子については今のところ、はっきりしない。

坂戸市内での縄文時代最古の遺跡は、善能寺の岡山遺跡で、早期（B C 7 5 0 0年頃～B C 4 5 0 0年頃）の撚糸文土器が出土している。縄文時代前期（B C 4 5 0 0年頃～B C 3 0 0 0年頃）には、気候の温暖化によって定住生活が定着し、台地の先端に集落がつくられるようになる。この頃の住居は、竪穴で長方形を呈し、中央または中央よりやや壁よりに炉がある。炉は、食物を煮炊きしたり、暖をとったり、外敵から身を守ったりするためなどに使用された。

縄文時代中期（B C 3 0 0 0年頃～B C 2 0 0 0年頃）には、遺跡数が増加し、4～5軒から10軒前後の住居がまとまって半円状に並ぶ集落がつくられる。住居は円形または楕円形となり、中央に炉がある。住居の他には木の実を保存する貯蔵穴や、熱した石をいれて肉を焼いた集石土塙などがある。その後、縄文時代後期から晩期（B C 2 0 0 0年頃～B C 3 0 0年頃）にかけては、遺跡数が減少する。自然環境の変化などによって社会不安が広まったと思われ、祭祀遺物の量が増加する。住居は、中期後半から後期半ばにかけて柄鏡形のものが現れるが、晩期には方形のものが多くなっていく。



▲石器（中小坂・増田作平氏寄贈 市立歴史民俗資料館蔵）



◆ 縄文時代
中期のムラ
(復原模型・市立
歴史民俗資料館蔵)
川のそばに、半
円状に住居が並ん
でいる。

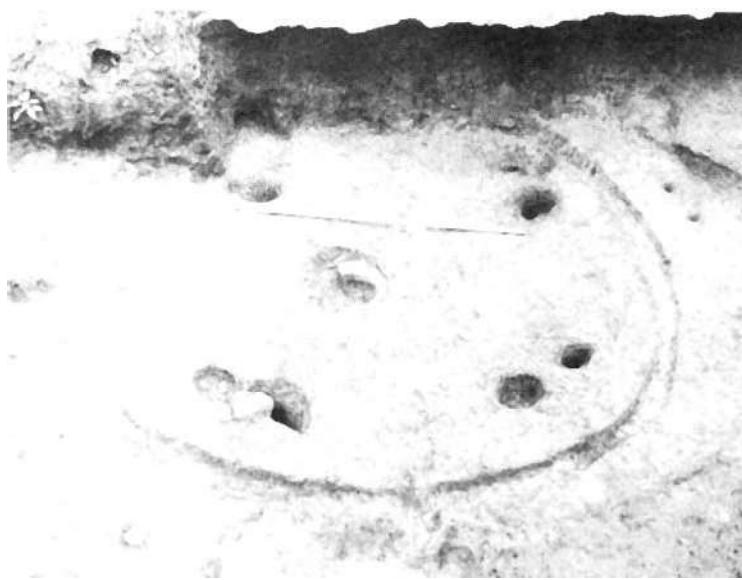
縄文時代中期



の住居

(復原模型・市立
歴史民俗資料館蔵)

中央に炉がある。
土器には木の実など
が保管されている。



◆ 縄文時代中期
の住居址
(森戸・大家小学校遺
跡)
円形で、壁ぎわに柱
穴がある。中央には土
器を埋めた埋甕炉があ
る。

2 稲作のはじまり

朝鮮半島南部から北九州に伝來した稻作は、徐々に東に伝わり、B C 100年頃には関東地方に及んだ。これによって、それまでの狩猟・採集による生活から、米作りを中心とする生活が始まる。耕地の開発や、労働力の統制などの過程でしだいに支配する者・される者の区別があらわれてくる。

坂戸市域においては、弥生時代中期（B C 100年頃～A D 100年頃）に木曾免遺跡（小沼）・附島遺跡（小沼）・塚越渡戸遺跡などに集落が営まれる。この頃使われていた土器には北関東を中心に分布する櫛を引いてつけた文様を持つものと、南関東を中心に分布する縄をころがしてつけた文様を持つものの二系統があり、坂戸はこの二つの土器文化の接点であった。この頃の住居は、小判形・隅丸方形のものであった。

弥生時代後期（A D 100年頃～A D 300年頃）になると、中期の二系統に加えて、地方色の強い土器文化が発生する。比企地方を中心に分布する吉ヶ谷式土器がそれで、北関東系土器によくみられるかめに、縄文を施したものである。吉ヶ谷式土器を使用する人々と、北関東系の櫛描文土器を使用する人々は、あまり接触をもたずに生活していたと考えられていたが、三福寺遺跡（堀込）から櫛描文のある吉ヶ谷式土器が発見され、二つの文化に交流があったことが証明された。



◀ 壺棺墓（小沼・堀之内遺跡）
弥生時代になると、墓と認められる遺構が出現する。この壺棺墓は弥生時代中期のもので、3つの土器を組みあわせている。中には幼児の骨が納められていたと考えられる。



◀ 北関東系の土器

(塚越・渡戸遺跡出土市立歴史民俗資料館蔵)



▲弥生時代中期の住居址 (小沼・木曾免遺跡)

方形周溝墓 (石井・^{ひいらぎ} 杓 遺跡)

弥生時代の墓には壺棺墓・甕棺墓の他、
方形周溝墓がある。杓遺跡からはこの3種
類の墓が発見された。集落と墓がセットで
発見された例として貴重である。



三福寺遺跡

(堀込)

2つの土器文化が
融合し、新しい文化
が芽生えはじめてい
たことが、初めて証
明された。

3 古墳の築造

古墳時代前期（300年頃～400年頃）になると、台地の縁辺部に小規模な集落が営まれる。小規模な谷を利用して耕作が行われたと考えられる。権力をもつリーダーが現れ統一が進み、多様だった土器文化も土師器に統一されてくる。この頃の住居は長方形・隅丸方形で、炉を持つ。土器では煮炊き用の台付甕が発達する。

古墳時代中期（400年頃～500年頃）になると、遺跡数は減少する。炉にかわってカマドが使用されるようになる。

古墳時代後期（500年頃～650年頃）には、台地縁辺に大集落が、また谷に沿う内陸に小集落が営まれるようになる。一軒の母屋的住居を中心に、数軒の住居が集まって共同体となっている。住居は正方形となり、カマドを持つ。カマドの発生は、食生活の変化をもたらし、さらに土器の用途がより分化されるようになった。前方後円墳や円墳がつくられ、次第に群集墳に発展していく。

市内の代表的な古墳・古墳群としては雷電塚古墳（小沼）・胴山古墳（石井）・白山神社古墳（石井）・土屋神社古墳（浅羽野）・石上神社古墳（北大塚）・善能寺古墳群（善能寺）・塚原古墳群（善能寺）などがある。



◀ 古墳時代後期の
住居址
(長岡・長岡遺跡)
正方形でカマドをもつ。



◀ 上谷遺跡復原住居（東坂戸）

昭和50年（1975）、東坂戸
団地の造成に先立ち、発掘調査が行
われた。発見された遺構のうち22
号住居址（古墳時代後期）を保存し、
当時の外観を推定復原した。

（現在は、柱のみ復原）



▲馬形埴輪（小沼・堀之内遺跡出
土 市立歴史民俗資料館蔵）

市内では形象埴輪の出土例は少ない。

大河原2号墳の石室（北峰）▶

横穴式石室。鉄製品が多く出土した。



◀ 雷電塚古墳

（小沼・県指定史跡）

後円部の墳頂に雷電社
が祭られている。



4 奈良・平安時代の坂戸

7世紀の後半になると、市内の遺跡数が増大し、分布も市内全域に広がるようになる。これまでの台地縁辺や、小河川沿いの内陸の集落に加えて、内陸の平野部にも大規模な集落が形成される。住居は方形であるが、古墳時代のものより小形化する。四本の柱穴をもち、周溝を巡らし、北または東にカマドを有する。また集落の中央に、納める税などを収納するための倉庫が掘立柱で建築される。土器は、土師器の他に須恵器が用いられるようになる。鳩山町など比企丘陵に窯がつくられ、坂戸市全域に供給されている。

この頃の主な遺跡としては、勝呂廃寺（石井）と若葉台遺跡（千代田）がある。勝呂廃寺は7世紀後半から10世紀にかけて存在していた寺で、古代寺院としては県内でも最大規模のものである。発掘調査によって、塔の相輪や「寺」と書かれた墨書き土器などが発見されている。若葉台遺跡は坂戸市と鶴ヶ島市にまたがる大遺跡で、倉庫跡などが発見されている。一説によると当時の入間郡衙（郡役所）の跡ではないかと考えられているが、はっきりしない。

また、青木の宮町遺跡からは石製の錘が、戸宮の清進場遺跡からは鉄製の錘が発見されている。これまで国内で古代の錘が発見された遺跡は、役所跡・寺跡・交通の要所などがほとんどである。このことから考えて、坂戸市の東部が奈良・平安時代にこのあたりの政治・経済の中心地であった可能性が高い。



◀ 奈良・平安時代の住居址

(塚越・住吉中学校遺跡)

8世紀中頃から後半にかけてのもの。カマドが2つあるが、写真右側（東側）の方が古く、こちらを廃棄して北側に造りかえたと考えられる。



勝呂廃寺出土の瓦

(市立歴史民俗資料館蔵)

▼若葉台遺跡（千代田）

奈良・平安時代の集落址。下の写真は昭和62年（1987）の調査時のもの。左下の掘立柱建物址はひさしをもっており、役人のすまいの可能性もある。



◀ 浅羽野の歌碑

（浅羽野・土屋公園内）

浅羽地区は『万葉集』に歌われた浅葉（羽）の地と推定されている。市内には他に『万葉集』ゆかりの大家ヶ原歌碑（四日市場）、『伊勢物語』ゆかりのみよしの歌碑（横沼）がある。

5 いざ鎌倉

貴族にかわり武士が勢力を増してきた頃、児玉党の一族が入西地区に本拠を構え、入西氏と称した。その子孫の浅羽氏・栗生田氏などが市内に本拠を構え、小代氏も市域に領地をもっていた。また、村山党の一族も勝呂地区に本拠を構えてすぐろ勝氏と称した。彼らは鎌倉幕府に従って活躍した。

鎌倉と地方とを結ぶ道として鎌倉街道が整備されている。市内にも鎌倉街道と伝わる古い道がいくつか残っているが、鎌倉時代にさかのぼるものかどうかは不明である。

承元4年（1210）につくられた小代行平の譲状によれば、上吉田・島田・赤尾近辺には「こさむのつつみ」・「あとかは」・「なかぬま」・「えそぬま」・「大とうのふるみち」などの堤・川・沼・道があった。また、『吾妻鏡』には寛喜4年（1232）に樽沼堤が大破したという記事があるが、この樽沼は横沼のことと考えられている。なお、横沼は正嘉元年（1257）に執権北条時頼によつて鎌倉の大慈寺釈迦堂に寄進されている。

13世紀の半ば頃から市内でも板碑（板石塔婆）がみられるようになる。板碑は供養塔で、長瀬町等で産出される緑泥片岩で造られる。年代のわかる市内最古の板碑は塚崎の墓地にある寛元4年（1246）のものである。新堀の金井遺跡で梵鐘などが铸造されたのもこの頃である。



◀ 鎌倉街道跡

森戸と四日市場の境を通る。上道・上ノ道などと呼ばれる。堀割状の道路遺構が残っている。この写真は南の鶴ヶ島市より眺めたもの。



◀ 万福寺の板石塔婆

(北浅羽・県指定考古資料)

徳治2年（1307）に、浅羽行成を供養するために建てられた。浅羽氏の本拠は万福寺一帯と考えられる。



木造薬師如来坐像



(小山・三福寺蔵県指定彫刻)

鎌倉時代中期以前の作。ヒノキ材の寄木造。

像高80センチメートル。



◀ 金井遺跡の溶解炉^{ようかいろ}

(新堀)

平成2年（1990）に行われた発掘調査で、鉄や銅を溶かした「湯」を鑄型に流し込んで鉄・銅製品を生産した鋳造遺跡であることがわかり、注目を呼びた。

6 『太平記』の時代

鎌倉幕府の力が強まるとともに、その御家人達も全国に活躍の場をひろげていった。小代氏は、九州にも所領をもっていたが、蒙古襲来をきっかけにその拠点を九州に移していく。また粟生田氏も、播磨国（兵庫県）などで主に活躍するようになる。

鎌倉幕府が滅び、南北朝が対立するようになると、坂戸市域は北朝の勢力下にあつたらしい。市内の板碑に刻まれているのはほとんど北朝の元号である。

この頃、乾峯和尚によって成願寺（成願寺）が開かれ、義堂周信の漢詩文集『空華集』に詠まれている。

南北朝時代は板碑の造立がピークに達した時期で、石井宗福寺の名号板碑などが建てられている。また、市内に残る中世の宝篋印塔は、ほとんどが14世紀末から15世紀初期にかけてのもので、塚越の西光寺・善能寺の四軒組墓地・青木の十王堂などに現存している。

大般若経の書写も行われており、延文5年（1360）・延和3年（1377）には青梅市塙船観音寺の大般若経が書写され、岩田下村（東和田か）という地名が見える。また、応永3年（1396）には日光市の輪王寺蔵大般若経が書写されており、厚河（厚川）・勝・粟生田上村などの地名がみえる。



◀ 成願寺（成願寺）

もとは臨済宗で武陵山と号し、五山・十刹につぐ諸山の寺格を有していた。創立当初は東和田付近にあった可能性もある。なお、寺は江戸時代に曹洞宗に改宗した。



▲苦林野古戦場（毛呂山町苦林・県指定旧跡）

貞治2年（1363）、坂戸市と毛呂山町にまたがる苦林野で、足利基氏と芳賀高貞が戦った。他に文和元年（1352）にも足利勢と新田勢がここで戦ったという。現在、古墳の上に記念碑が立つ。



▲宝篋印塔（塚越・西光寺）

もと塚越の五輪山にあった。
「勝次郎左衛門入道頼阿」とあり、
勝氏関係の遺物としても貴重。西
光寺には他に2基の中世の宝篋印
塔が残る。

◀ 石井宗福寺の板石塔婆

（市指定考古資料）

文和5年（1356）、宗福寺の開山
と伝わる教覚の三回忌にあたって建てら
れた。市内最大の板碑であり、六字名号
板碑の代表作でもある。

7 戦乱の時代へ

鎌倉公方足利持氏は、室町幕府と対立。正長2年（1429）に永享と改元されたのを認めず、正長という元号を使い続けた。堀込の三福寺遺跡から出土した板碑には「正長三年」と刻まれている。永享10年（1438）持氏軍と幕府軍が衝突（永享の乱）、持氏に属した浅羽下総守は横浜の称名寺で自害している。

また、永享12年（1440）、結城氏朝が持氏の遺子を奉じて結城城（茨城県）に立て籠もる。結城氏に味方した勝豊後守は、足利（栃木県）で殺害されている。

この年、入西一揆が上州（群馬県）に出陣している。詳しくは不明だが、入西郡（主に今の坂戸市・毛呂山町・越生町）の領主の地縁的集団と思われる。

15世紀の末になると、農民達の力が向上し、月待や庚申待などの行事を通じて連帯が強まった。このころ造られた板碑にはこれまであまり板碑に関わりがなかった農民達の名前が列記されるようになる。

また、熊野（和歌山県）参詣が流行し、勝の門光坊（門香坊）、浅羽の灌常坊・大聖坊、厚川の多福坊などの修験が市内に存在した。聖護院門跡道興は、東国での修験や名所を回り、文明18年（1486）には勝で歌を詠んだことが『廻国雜記』に記されている。



◀ 多和目の城山

（県選定重要遺跡）

15世紀頃から多くの城が築かれるようになった。この城山は、山頂に土壘と空堀が残るが、歴史はよくわからない。高麗川に臨む急崖を利用して築かれている。



▲三福寺遺跡（堀込）出土の板碑

（市立歴史民俗資料館蔵）

正長2年の9月5日に永享と改元された。

その1年後でもなお旧元号が用いられている。

▼大宮住吉神社（塚越）の

むなふだ
棟札（塚越・勝呂稔氏蔵）

持氏が社殿を再興したと伝えている。



◀ 道興の歌碑

（石井・勝呂公民館分館内）

熊野を拠点とする修験者しゅげんしゃ
を統轄する聖護院門跡じょうごいんもんせきであつ
た道興は、東日本の修験を
歴訪した。途中、「旅なら
ぬ 袖もやつれて 武藏野
や すくろの薄すすき 霜に朽に
き」と詠んだ。

8 後北条氏の支配

小田原の北条氏（後北条氏）は次第にその勢力範囲を広げ、戦国時代の半ばには坂戸周辺をほぼ支配下におさめた。北条氏の『所領役帳』によれば弘治元年（1555）には、紺屋・沢木・堀込などで検地が行われている。また、永禄11年（1568）には、萱方が小笠氏の領地として保証されている。

現在の坂戸地区一帯は、河越城（川越市）の城代大道寺氏が支配していた。天正12年（1584）には、元坂戸から百姓39軒を移して坂戸宿が新設されたと伝わる。また、戸口には税を川越に届けるよう、印判状が発給されている。

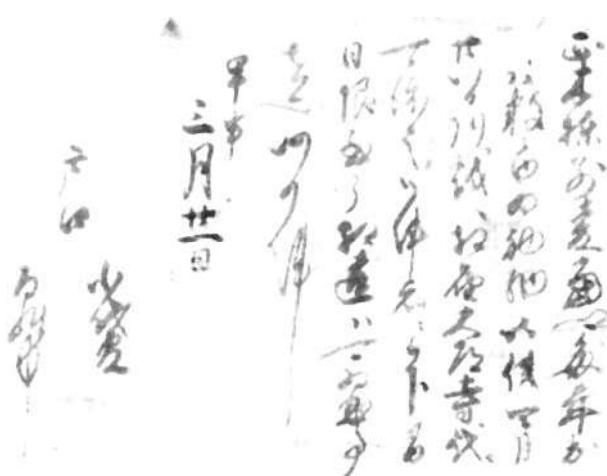
このころ、百姓達は団結を深め、北条氏の無理な要求に対して抵抗した。天正7年（1579）、小山では人夫を出すかわりに錢を出すことになっていたが、無理に人夫を出させたので百姓達が抗議を行った。北条氏は、抗議をうけいれざるをえなかった。

天正18年（1590）、豊臣秀吉の小田原攻めによって北条氏は敗北する。この時、関東各地で豊臣勢と北条勢との戦いがあった。坂戸市内では、浅羽城（鶴舞）が落城したとか、小山の三福寺が焼かれたが薬師如来像は木の上に逃げて無事だったなどといった話が伝わっているが、事実かどうかは不明である。

◀ 北条氏の印判状

（戸口・三田千代氏蔵）

天正12年（1584）の文書。戸口の小代官（村の有力な百姓）らに対し、毎年定められた正木棟別麦（税の一種）のうち初納分5俵を川越に納めることを命令している。北条氏の権威の象徴である虎の印判がおされている。





▲北条氏照印判状（小山・平田イツ氏蔵）
うじてる

小山村では人夫を出す代わりとして錢を納め
ることが決められていたが、川越より人夫を不
当に徵発されたため、百姓達が抗議を行った。
北条氏照は、百姓達の言い分を聞くので耕作に
従事するよう、この文書で命令した。
平田家には、他に氏照から平山伊賀守にあて
た書状も残っている。



▲片柳休台寺の板碑

市内最新の板碑で元亀3年（15
72）のもの。市内では珍しい題目
板碑で、庚申供養板碑でもある。



◀ 木造薬師如来像と胎内銘
たいないめい

(元町・薬師堂蔵 市指定歴史資料)

天文24年（1555）に奉納された。像は後世に補修さ
れている。首裏の銘は当時のもので、市指定文化財である。

9 坂戸の領主と支配

天正18年（1590）、徳川家康は江戸城にはいり、家臣団の知行割を行った。横沼・小沼・紺屋などが川越藩領となった他、市内のほとんどの地域は旗本領・寺社領となった。

稻生氏^{いのう}は多和目・東和田・善能寺を領し、城山（多和目）の中腹に正信庵を建てて菩提寺とした。稻生家に伝わる古文書は、旗本の様子を知るうえで貴重であり、県立文書館に寄託されている。河村氏^{こうむら}も多和目を領し、重勝庵（多和目）を菩提寺とした。横田氏は片柳・島田を領し、休台寺（片柳）を菩提寺とした。嶋田氏は坂戸を領し、永源寺（仲町）を開基して菩提寺とした。黒川正直は、長崎奉行・大目付など幕府の重職を務め、大智寺（石井）を中興して菩提寺とした。その墓は県の旧跡に指定されている。

寺社では永源寺（仲町）、永源寺（多和目）、大智寺（石井）、宗福寺（石井）、観音寺（四日市場）、大宮住吉神社（塚越）、白山神社（勝呂神社・石井）、熊野社（国渭地祇神社・森戸）が朱印状によって朱印地を与えられた。

天正18年の坂戸村検地をはじめとして、市内各地で検地が行われ、年貢徵収のための基礎台帳である検地帳（水帳）が作成された。これを基に、本年貢・小物成などの他、多くの種類の税が賦課された。



◀ しょうしんあん いのう
正信庵の稻生氏墓地

（多和目）

正信庵は稻生氏が墓守の庵として建立し、祖先である正信にちなんで名付けられた。城山の中腹にあり、稻生氏代々の墓石が並ぶ。



黒川丹波守正直墓 ◀

(石井・大智寺 県指定旧跡)

大智寺には正直の父正秀から、8代目正好までの黒川氏代々の墓石が並ぶ。

▼武州入間郡石井村田方検地水帳

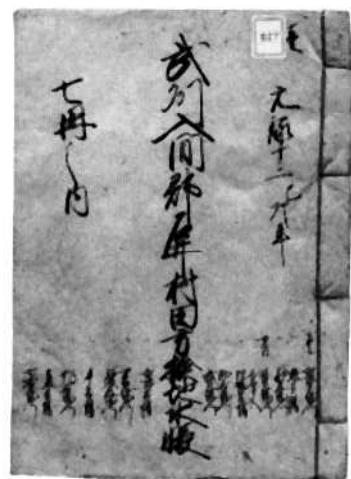
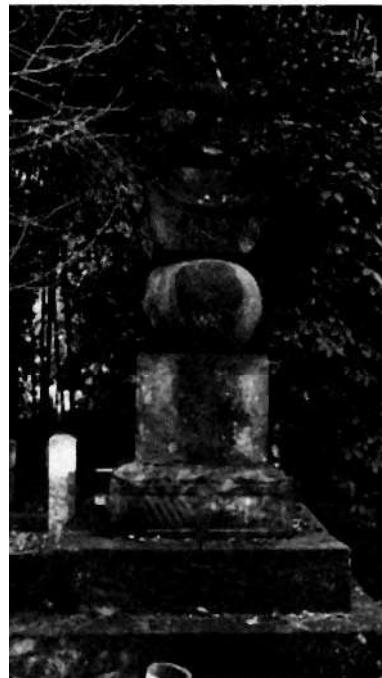
(石井・岡野作太朗氏蔵)

元禄12年（1699）の検地帳。字地名、田の等級面積、百姓名などが記されている。

嶋田利秀画像
としひで

(仲町・永源寺蔵)

嶋田重次は、坂戸周辺で2000石を拝領した。その父利秀（永源）は坂戸に隠居し、永源寺を開基した。



10 江戸時代の村

江戸時代の村は、領主にとっては支配のための単位であり、農民は宗門人別帳しゅうもんにんべつちょうによって把握されていた。反面、農民にとっては日常生活の場であるとともに生活・生産のための共同組織であるという二面性をもっていた。

戦国時代に落人・浪人などが帰農して村を開いたと伝えられる村は多く、江戸時代初めにはこれらの子孫という家が主に村役人を務めた。村役人は領主の指示によって村を運営し、年貢を徴収した。また「五人組」という組織によって村人相互の監視体制がとられた。時としてこうした村内部での階層差・身分差が、利害をめぐって村人同士の対立をひきおこすこともあった。また、村役人の不正追求などの村方騒動が起こることもあった。

農民は、講をつくってまとまりを強めた。講には、伊勢講・大山講・榛名講・はるな御嶽講・念仏講といった宗教的なものと、無尽むじん・頼母子たのもしなどの経済的なものとがあった。

村には取決めや慣行などの形で秩序があり、それに背いた者は過料金を徴収されたり、村八分や追放となったり。

また、土地の境界・入会権・水利・災害対策などをめぐって村同士が対立することもあった。「論所」ろんしょといった地名や、梶坊權現かじぼうごんげん（小沼）や九頭龍くずりゆうの伝説（島田）はこうした村同士の争いを物語るものである。



四日市場村巻絵図

(四日市場・小鹿野富夫氏蔵)

江戸時代の四日市場村の景観を今に伝え
る。



◀ 宗門人別改帳

(欠ノ上・小島武司氏蔵)

享和4年（1804）のもの。村人すべて
は全徳寺（成願寺）に属していた。当時の家
族構成などもわかる。



▲林家の長屋門と墓地（赤尾）

林家は戦国時代末に赤尾に来往したと伝わる。
代々名主を務め、多くの古文書を残す。



◀ 梶坊権現（小沼）

小沼の地はたびたび水害に悩まされて
いた。伝説によれば、東光寺（小沼）に
住んでいた梶坊という僧が祈禱したとこ
ろ、対岸の赤尾・島田の諏訪明神が堤を
壊すのが水害の原因とわかった。そこで
梶坊は自ら堤の守護神となるべく沼に身
を投げたという。

1 1 交通の整備

江戸時代には街道が整備され、宿駅がつくられた。街道沿いには一里塚や道しるべがつくられた。

慶安5年（1652）、八王子千人同心が日光山火防を命じられると、八王子と日光との往復に坂戸宿を通る日光脇往還が使われるようになった。坂戸宿は千人同心の一泊目の宿泊地として栄え、毎月3・8の日には市が開かれている。

人々は道を利用して耕地・市・鎮守などに出かけた。道は人々の生活にとってなくてはならないものであった。江戸時代後期になると、整備された街道を利用して伊勢神宮（三重県）など寺社参詣でかけたり湯治でかけたりと、行動範囲が広がった。そして旅日記などを残す者も多くなった。しかし、反面では交通量の増大が宿駅の負担増を招き、人馬不足を補うため18世紀初めには周辺の村々が人馬を提供する「助郷」が制度化され、農民の負担が増加していった。

交通の発達は街道だけでなく、水上交通にもいえる。河岸場・渡し場が設けられた他、高麗川を利用して飯能の西川材を江戸に運ぶ筏流しが行われた。



▲中里の一里塚（市指定史跡）

塚がなくなり、エノキが残っている。



▲小沼の一里塚



▲ 旧日光街道の碑

(上吉田)

往来手形



(戸口・新井家蔵三田家文

書 市所蔵)

天保10年(1839)

に戸口村の要吉が草津(群

馬県)へ湯治に行くので、

関所を通してもらうよう頼

んだ文書。

◀ 日光街道の道しるべ(元町)

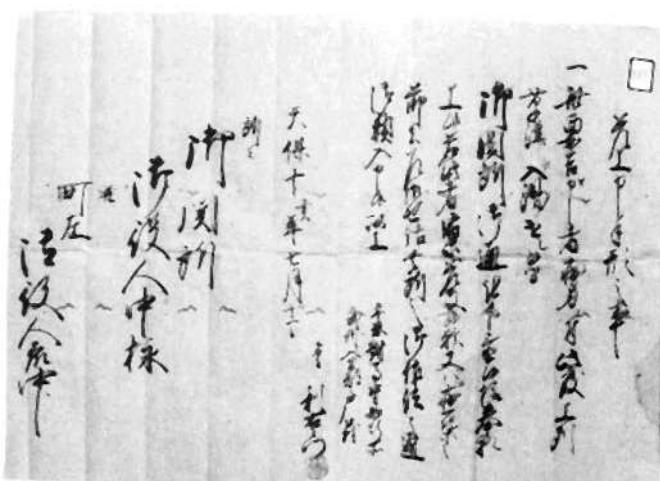
坂戸小学校前に残る。宝暦10年(1760)に
建てられたもの。



▲ 石橋供養塔(北峰・市指定記念物)

宝暦5年(1755)に建てられ、50ヶ

所以上の村々の名が刻まれる。

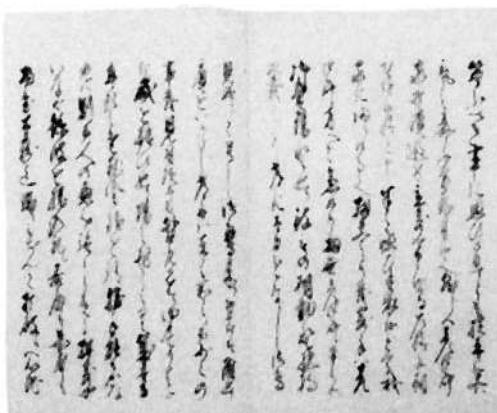


12 一揆

18世紀半ばすぎになると、助郷の負担はますます増大し、明和元年（1764）には新たに課せられた助郷に反対する大規模な一揆^{いっき}がおきた。明和の伝馬騒動・武上騒動などと呼ばれる事件である。^{なかせんどう}中山道ぞいの農民が次々と蜂起して江戸に向かい、幕府は無条件で増助郷を免除することとして一揆を鎮静化させた。しかし、一揆の矛先は在郷商人や豪農・名主などに向けられ、坂戸近辺でも激しい打ちこわしが展開された。市域では紺屋村の名主の彦四郎の家などが打ちこわされている。

慶応2年（1866）、米価高騰によって全国各地で大規模な世直し一揆が起こった。名栗村から起こった武州一揆もその一つで、主に下層の農民が参加し、またたく間に広まつていった。各地の地主・質屋・穀屋が打ちこわされ、坂戸市域でも多くの家が打ちこわされた。現在でも、その時につけられたと伝わる刃物の傷が、柱などに残る家が残っている。

これらの一揆の原因は、直接的には幕府の政策への反抗や、社会不安などであるが、本質的には村内部での階層差・身分差と、それに伴う村内の利害対立・諸矛盾が顕在化したものであった。こうした一揆の高揚に加え、大飢饉^{ききん}、異国船の渡来などによって、幕府権力は動搖していった。



◀ 百姓騒動記（本町・宮島俊雄氏蔵）

明和の伝馬騒動の際の坂戸周辺の様子を記したもの。慶応2年（1866）の写本。掲載したのは紺屋村の名主、彦四郎の家の打ちこわしを記した部分。



山王の森

(日の出町)

現在の坂戸神

社境内。伝馬騒

動の際、110

ヶ村の名主がこ

こで集会を行い、

一揆鎮圧の方針

をうちだした。

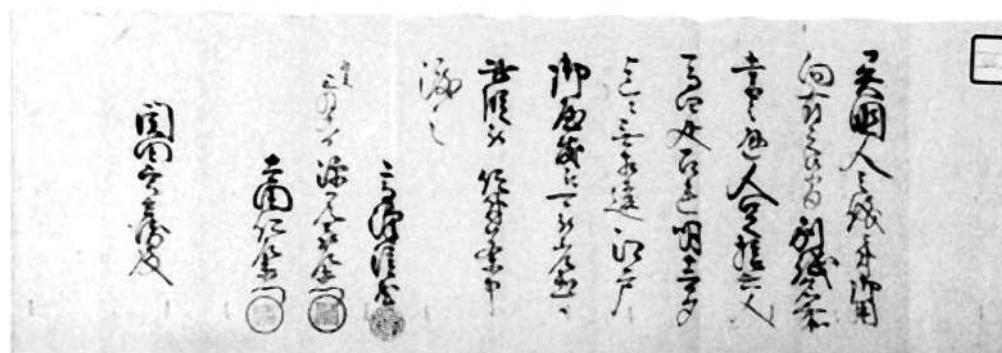
▼ 亂妨打毀シ騒動之覚 (本町・宮島俊雄氏蔵)

武州世直し一揆の様子を記録したもの。



▼ 異国船渡來のため人足差し出すにつき達 (多和目・関田三一氏蔵)

外国船の渡来に対し、村々より人足が動員された。



13 幕末の群像

江戸時代末期になると、寺子屋によって庶民が学ぶ機会も多くなつた。市内にも多くの寺子屋があつたようだが、史料はあまり残っておらず、筆子石等から推定する他はない。

井上淑陰・林信海・大徳周乗などの学者が多くの著作を残した。

文学では俳諧が流行し、石川桃齋・関田曾木などが活躍した。

剣術を習うものも増え、平常無敵流の浅海・神道無念流の大川・天然理心流の横田・甲源一刀流の関口といった道場が賑わつた。

倒幕運動に参加する志士も多く、笠井伊藏・桜国輔・竹内啓などが輩出しが、いずれも幕府との戦いの過程で命をおとしている。

他に、赤尾の林蔵・真仁田寅吉などの俠客も活躍した。

幕末の動乱の際には、飯能戦争において薩摩藩・忍藩などの兵が坂戸に布陣するなど、坂戸も平穏ではありえなかつた。

▼ 石川桃齋の碑（北峰）



▲ 大徳院墳跡（森戸）



大徳周応・周乗・子竜の3代にわたる墳の跡。



▲ 大川道場（昭和30年代）（横沼）

大川平兵衛英勝が開いた。その剣は
実戦を想定したものであった。

たけのうちひらく
竹内啓 の碑（竹之内）

►
啓は本名を小川嘉助という。慶応3
年（1867）に松戸（千葉県）で斬
首された。



◀ 赤尾の林蔵墓（赤尾・光勝寺）

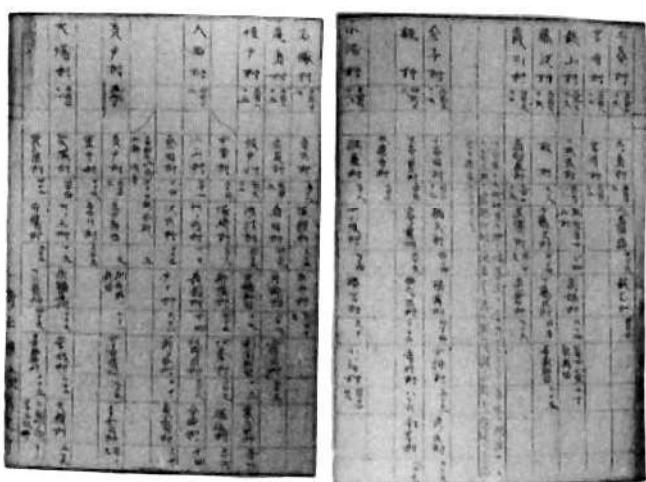
林蔵は本名を山崎林蔵といい、講談・芝居など
で知られた侠客である。高萩（日高市）の伊之松の
とば
賭場に殴り込みをかけて伊之松に致命傷を負わせ
たが、文化元年（1804）に伊之松方に殺された。

14 近代坂戸の夜明け

明治新政府は、行政区画の改変を実行し、従来の大名領をそのまま藩領とした他、旗本知行地や幕府天領などに県を置いた。坂戸は川越・古河・前橋の各藩領の他は武蔵知県事支配となった。その後、幾度かの変遷を経て、明治4年（1871）には市域全部が入間県に属し、6年には熊谷県、9年に至って埼玉県に属した。

行政機構としては、区制から大区小区制、そして明治12年（1879）には旧郡制度が施行され、町村が末端行政単位として復活した。町村会規則が制定され、戸長が町村政を統括した。17年には連合戸長制となり、21年には町村制が公布された。明治22年（1889）には三芳野・勝呂・坂戸・入西・大家の5ヶ村が誕生し、坂戸村は明治29年（1896）に町制を施行している。

近代化政策の一環として徴兵制・地租改正が実施された。教育については、明治5年（1872）の学制頒布をうけ、市域では明治6年に横沼・塚越・赤尾・坂戸・吉田・戸口・葛岡・掘込・北三芳野といった学校が開校する。その後もいくつかの学校が開校し、統廃合を経て三芳野・勝呂・坂戸・入西・大家の各小学校となる。



◀ 町村合併調上申

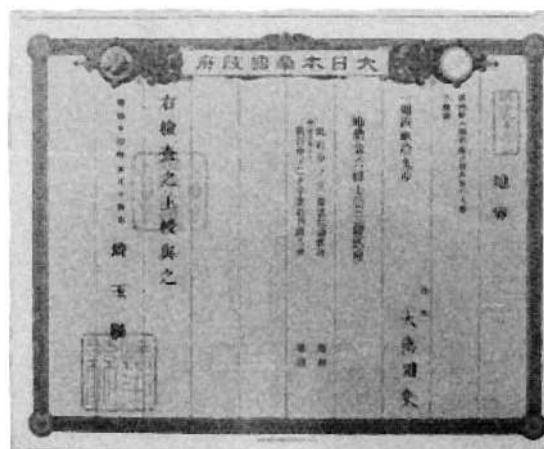
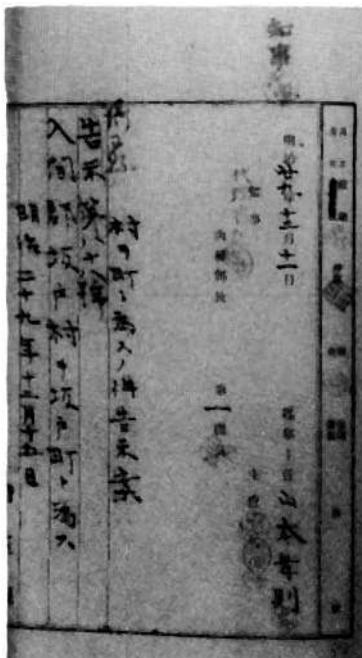
（埼玉県行政文書・明588-1

1 埼玉県立文書館蔵）

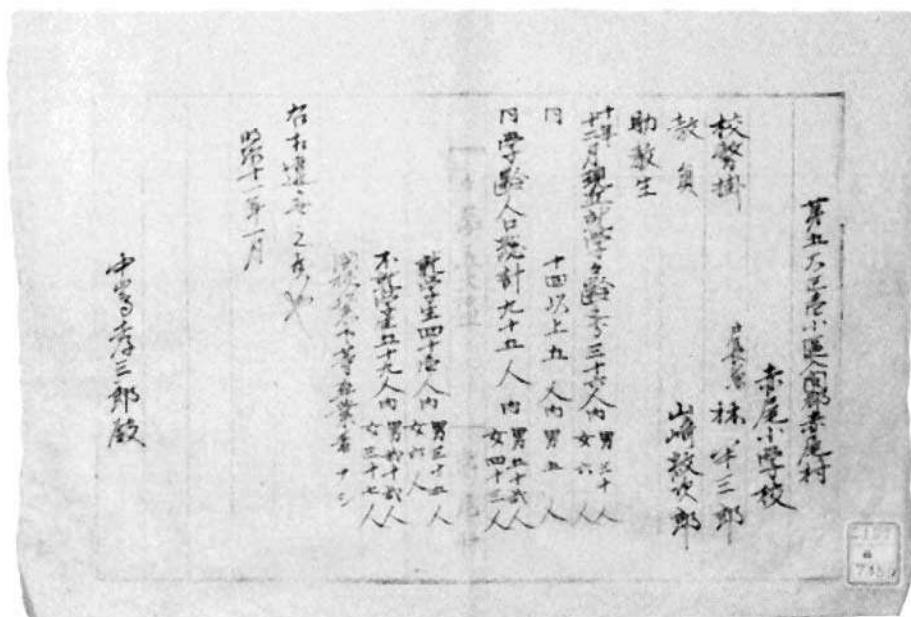
明治20年（1887）の
町村編成案。小沼村、石塚村、
尾島村、森戸村、大場村など
があり、坂戸村と入西村も後
に実施されたものとは構成が
異なる。

◀ 村ヲ町ト為スノ件告示案

(埼玉県行政文書・明2057 埼玉県立文書館蔵)



▲地券（森戸・大徳家文書 市所蔵）



▲赤尾小学校要覧（埼玉県立文書館保管 赤尾・林茂美家文書7459）

明治6年（1873）、光勝寺を利用して開校された赤尾学校が前身。後に勝学校（現在の勝呂小学校）に合併される。

15 明治・大正時代の坂戸

高麗川・越辺川は大雨によってたびたび氾濫し、流域に多くの被害をもたらした。明治43年（1910）・大正2年（1913）の水害は特に大きく、溺死者もでている。これらの対策として築堤や堤防の修築が頻繁に行われた。横沼出身の製紙王、大川平三郎は、築堤に際して私費を投じた。完成した堤は大川堤と呼ばれた。

耕地の整理・開墾も行われ、明治40年（1907）には島田・赤尾の耕地整理が着工している。また三芳野でも整理が行われ、一毛作地域であったのが二毛作地域となった。

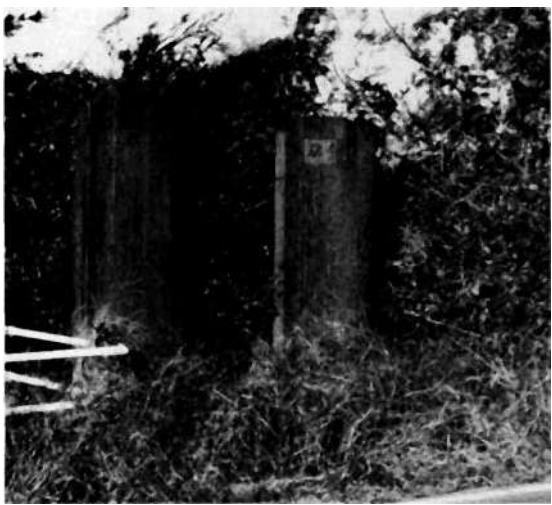
殖産興業の政策の下、米・麦の生産の他、養蚕などの副業化が奨励され、明治23年（1890）には赤尾の山崎茂十郎が盛業館を設けて蚕業普及に貢献している。また、織物業でも近代工場への脱皮の動きがみられた。

明治40年代には神道の国教化政策によって神社の統合が進められ、その過程で多くの神社が合祀こうしされて姿を消した。しかし、書類上は合祀されたが、社殿を残して遙拝所ようはいじょとし、祭りを続けた所も多かった。



◀ 大川堤の碑（横招）

戦後の河川改修により大川堤が廃堤となつたため、その北方約1キロメートルの道場橋の脇に記念碑が建てられた。



◀ 耕地整理記念碑（島田）

島田の耕地内に立つ。左が明治の耕
地整理記念碑、右は昭和の土地改良記
念碑である。

▼ 盛業館（赤尾）

山崎茂十郎が私費を投じて自宅内に
建設した。蚕種の改良等を行った。

（平成 5 年解体）



◀ 八幡神社（東和田）

北浅羽の八幡神社に合祀され
たが、社殿は遥拝所として残さ
れ、祭りも行われた。昭和 52
年（1977）の社殿改築を機
に、翌年遷座祭が執行された。

16 近代交通の発達

坂戸における近代交通としては、まず河川交通があげられる。河岸場から薪炭材や座筵などが東京へ、東京からは肥料や塩・砂糖などがもたらされた。また、筏流しも引き続き行われていた。

陸上交通としては乗合馬車があり、島田一川越間、坂戸一松山間などを運行していた。ラッパを吹いて合図したことから「テト馬車」と呼ばれた。しかし、大正時代をすぎると乗合自動車にとってかわられた。

大正5年（1916）には東上鉄道が坂戸町駅まで開通。坂戸町一池袋間を約1時間40分で結んだ。大正12年（1923）には小川町まで延長された。昭和7年（1932）には坂戸町一森戸間に越生鉄道が開通。砂利の輸送が行われた。昭和9年（1934）には坂戸町一越生間が開通。旅客輸送が開始され、「ガソリンカー」が走った。こうした鉄道の発達により、河川交通はその使命を終えることとなった。

道路等も整備された。それまで川を渡る時には仮橋や渡し船に頼っていたが、洪水で流されることも多く、次第に橋梁が建設されていった。大正3年（1914）に高麗川大橋、大正9年（1920）に高坂橋が完成した。



◀ 吉田河岸（上吉田）

高麗川の上流から筏に組まれて運ばれた木材は、ここで組み直されて千住（東京都）へ運ばれた。この写真の模型は、昭和63年（1988）に北坂戸公民館の文化祭にて作成されたものである。



◀ テト馬車のターミナル跡

(島田)

島田宿のつきあたり、かつての渡し場の所がテト馬車のターミナル跡である。かつては一日二往復、ラッパを吹きながら馬車が川越との間を運行していた。

東上鉄道会社汽車時刻表

(埼玉県立文書館保管 赤尾・林
茂美家文書 10241)

大正5年（1916）10月、坂戸町駅開業当時の時刻表。上下共
10本が運行しており、池袋—坂戸町間は約1時間40分かかった。



▲高麗川大橋の開通（高麗川大橋開通記念郵便はがき 新堀・齊藤松五郎氏提供）

大正3年（1914）2月1日にかけられた木造橋。後にコンクリート製となった。

17 戦争の時代

昭和初期は泥沼の戦争の時代であった。学校では昭和16年（1941）の国民学校令の制定などにより、国家への忠節、さらには戦争を意識した教育が行われた。多くの人が出征し、戦死した人も多かった。生活物資が不足し、食料は配給制度に、衣料は衣料切符制になるなど苦しい生活が続いた。軍需物資も不足し、永源寺の鐘など金属は供出されて武器となった。

坂戸には陸軍坂戸飛行場が建設され、その際多くの人々が勤労奉仕という形で動員された。また、飛行場の建設によって鶴ヶ島村大字戸宮は村内の他の地区と分断され、勝呂村に編入された。飛行場が存在したことから、坂戸もたびたび空襲目的地となった。入西国民学校の校庭には空襲によって大きな穴があいたといふ。

昭和20年（1945）8月15日、日本の敗戦によって戦争は終決した。

▼ お守り袋（赤尾・山崎群治氏寄贈 市立歴史民俗資料館蔵）



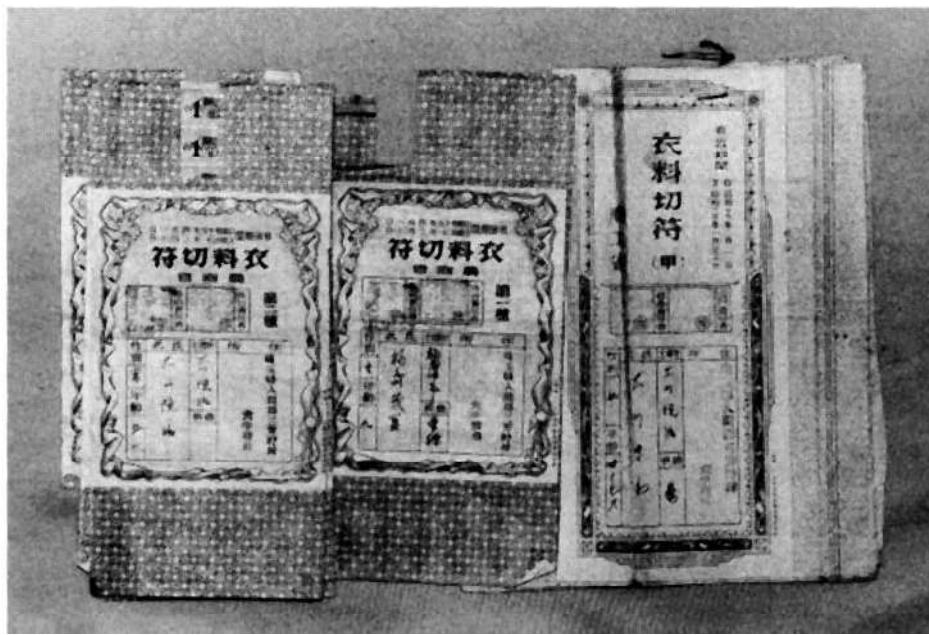
▲戦没者慰靈塔

（南町・雲ヶ谷公園）

昭和46年（1971）に完成

した。





▲衣料切符（横沼・大川寅五郎

氏寄贈 市立歴史民俗資料館蔵）

戦時貯蓄債券



（横沼・斎藤吉五郎氏寄贈 市立歴史民俗資料館蔵）

坂戸飛行場内の兵舎▼

（石井・柏俣茂氏提供）

他に格納庫・トーチカなどがあった。



18 戦後の坂戸

民主化の流れのなか、青年団が社会奉仕活動や娯楽の提供を行った。青年団活動は、次第に学習活動へと移行し、機関誌・文芸誌の刊行が活発化した。また、婦人会の活動もさかんになった。

昭和21年（1946）には旧陸軍坂戸飛行場が開拓地となり、多くの人々が入植した。昭和22年には警防団が消防団となり、また勝呂公民館がいち早く設置されて社会教育活動の一拠点となった。この年、キャサリン台風によって市域にも被害があり、治水対策促進要求運動が盛り上がった。

学校については、国民学校が小学校となった他、中学校が開校したが、当初は小学校との同居がほとんどであった。三芳野・勝呂・坂戸・入西・大家といった中学校が開校し、昭和31年（1956）には三芳野・勝呂中学校が合併して住吉中学校が、昭和42年（1967）には入西・大家中学校が合併して若宮中学校が誕生した。

昭和29年（1954）、1町4ヶ村の合併が実現。新たな坂戸町が誕生した。その際多和目地区では坂戸町と分離して高麗川村と合併しようという動きがあった。また、鶴ヶ島村に対して県より坂戸町との合併勧告がなされたが、実現しなかった。昭和38年（1963）には現在も市章として使われている町章が制定された。

◀ 坂戸飛行場開拓に関する書類

（市所蔵）



旧飛行場への開拓入植は、昭和21年（1946）に始まった。当時は農具もほとんどなく、住居も粗末で、地面が堅いために開墾が困難であるなど、苦しい生活を強いられたという。



◀ キヤサリン台風

の被害

(『昭和22年9月 埼玉県水害誌附録寫眞帳』より転載)

キヤサリン台風は市域に大きな被害をもたらした。特に勝呂村では、越辺川の堤防が決壊し、死者5名、家屋の流失6戸、水田300反が収穫不能となるなど、その被害は重大であった。

◀ 合併促進のポスター

(市所蔵)

▼ 町章の決定

約320点の応募作品の中から、大阪市の国賀恵美子氏の作品が当選した。



19 坂戸市の誕生から現在へ

高度経済成長を背景とした開発の波は、坂戸にも押し寄せた。昭和40年（1965）には東上線の川越市—坂戸町間が複線化、昭和43年（1968）には東松山までが複線化された。昭和50年（1975）には関越自動車道鶴ヶ島インターチェンジが開設、都心との距離はますます近くなった。昭和39年（1964）には駅南土地区画整理がはじまり、昭和42年（1967）には建設省告示によって北坂戸・富士見地区の区画整理区域が決定した。この頃、第一住宅・西坂戸団地・鶴舞団地がつぎつぎと造成され、昭和48年（1973）には北坂戸団地の入居を控えて北坂戸駅が開設されている。

昭和40年代以降の坂戸の人口増加はめざましく、昭和51年（1976）9月1日、県下39番目の市として坂戸市が誕生した。同時に坂戸市民憲章もつくられた。

その後も開発は進行し、昭和52年（1977）には東坂戸団地が入居開始、昭和54年（1979）には若葉駅が開設され、翌年には若葉台団地の入居が始まる。こうした人口増に対応し、各種の施設や生活基盤が整備された。小・中学校も増設され、5小学校・3中学校であったのが現在では13小学校・8中学校となっている。

坂戸毎日マラソンをはじめ、市民参加の行事・イベントも盛んになっていった。昭和61年（1986）には市制施行10周年に際して平和都市宣言がなされ、昭和63年（1988）にはアメリカ合衆国のドーソン市と姉妹都市となり、国際交流事業が開始されている。



◀造成中の西坂戸

地区

(泉町・田中一郎氏提供)

現在の城山中学校付近から城山小学校方面を望んだもの。建物がまったく見えない点が現在と大きく異なる。

建設中の

北坂戸中学校



(泉町・田中一郎氏提供)

市制施行直前の昭和51年（1976）4月に開校した。



◀市制施行を

祝う人々

文化会館での記念式典の後、商店街で「坂戸のまつり」が催された。

坂戸市文化財ガイド

坂 戸 の 歴 史

平成4年3月30日発行

平成12年3月10日第2刷発行

発行者 埼玉県坂戸市教育委員会

生涯学習課文化財担当

〒350-0292

埼玉県坂戸市千代田1-1-1

電話 0492-83-1331 (代)